
W i n n y

綾畝章人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

W i n n y

【Nコード】

N 2 5 4 2 C

【作者名】

綾 畝 章 人

【あらすじ】

普通の生活を送っていた女子大生紗香は、W i n n y流出事件の被害者であると誤解されトラブルに巻き込まれる。それは誤解であり、他の犯人による偽装であったのだが、この事件により紗香の生活は一変してしまう。

W i n n y (前編)

その夜も私は明子と電話していた。

「だから、留学はしないって」

いつもと変わらない何気ない会話。

「言葉通じる自信がないし、友達とか家族とかから離れちゃうから
後から知る事になったあの事件が、

「え、彼氏？ 関係ないよ、それは」

その時もう既にはじまっていたなんて、

「うん、そう……じゃあ、またね」

私はまったく知りませんでした。

だからその日、前川さんと会った時も、あ、今日は不機嫌だなと思っただけで、まさかいきなり別れ話を切り出されるとは思ってもいませんでした。

「裏で二股がけやってたなんて、信じられねーヤツだよ」

もちろん私はそんな事してません。以前、武田君っていうゼミの知り合いの人に告白された事もあったけど、ちゃんと「彼氏がいるから」ってお断りしたし、前川君の他に特に深いお付き合いのある男友達がいるって事ありません。私がそう言うのと、前川君はパソコンからプリントアウトした紙を見せて言いました。

「お前のデスクトップだろ？ 彼氏との写真なんかはっちゃって」

それは何かの画像を印刷したもので、確かに私と知らない男の人が写った写真が壁紙になっていて、でも私のパソコンの画面ではありませんでした。

「知らないよ」

「嘘つけ、W i n n y やってんだろ？ 日記とか流出して、全てお見通しなんだよ」

前川君はそれだけ言うと、私の弁明を聞かずに去って行ってしま

いました。

それだけでも呆然とする事態だったのですが、その後明子と話して、事態の大きさにさらに驚かされました。

何でも、私の日記や論文などがインターネットを経由して世界中に広まっていて、そんな事実はないのに、私が二股がけをしていたって事が日本中に知れ渡っていると言うのです。

「前川君と大谷先輩に二股って、やるじゃん紗香」

明子はそういつて見直したと変なところで褒めてくれたのですが、私は何が何だかさっぱりわからず、一人途方に暮れてしまいました。

私が本当に大変な事に巻き込まれたんだ、って実感したのは警察の人が訪ねてきたからで、捜査協力を要請したその人たちは、私のパソコンを持っていつてしまいました。

私はどうしてそんな事をするのか訪ねたのですが、「違法ファイルの証拠隠滅を防ぐためだ、場合によってはあなたを逮捕する」というような事を冷たく言い放たれてしまいました。私は何も悪い事をしていた自覚が無かったのですが、その時になつてはじめて、いよいよ本格的に大変な事になつてしまった、もしかしたら逮捕されてしまうのかもしれない、と思うようになりました。

前後してマスコミの方が押しかけてきて、私に色々聞いてきたので、私は少しでも事実が明らかになり、無罪である事を知ってもらいたくてできる限りの事をお話したかったのですが、記者さんの言っている事の意味がほとんど分からず、ただ、知りませんか、分かりませんかとか答える事しかできませんでした。

その結果、3日後に私は雑誌を示しながら明子に不満をぶつける事になったのです。

「何で私のファイルが流出したのか分からないって言ったのに、本人は可能性を否定。自分は絶対大丈夫だと思いつてWinnny

を使い続けたツケがここに出たのであろう』なんて書かれないといけないの」

もっともそれはまだ可愛い方で、私がるで著作権に関して意識の低い、遊び好きのいい加減な学生であるかのように書かれ、流出被害についても自業自得であると書かれ、記事の終わりの方では、「彼女のようにWinnyを使い続ける者は、いつ被害者になるともしれない加害者である事を、いい加減に気付き肝に銘じておくべきであろう」なんて見当違いの批難までされた。

明子はそんな私の抗議を、雑誌を読みながら聞き流し、

「まあWinnyで流出つてネタ、タイムリーだからね。マスコミもそう書きたいのよ」

何て事を言います。

明子は知ってるんだ、Winny。前川君が言っていた謎の言葉。雑誌にも繰り返し出ていたその言葉。気になつていたものの、今さら知らないというのも恥ずかしかったのでそのままにしていたのですが、明子が詳しくそうに語っているので思いきって聞いてみる事にしました。

「それで、Winnyって何？ コンピューターウイルス？」

「あきれた、ネットからmp3とかダウンロードできるソフトよ、使ってたんでしょ？」

そういうものがあるとは知らなかったなので、素直にそう言いました。マスコミの人にもそう言ったんですけどね。

明子はそれをあっさりと受け入れてくれて、

「まあ紗香そーゆーの苦手っばいもんね。じゃ、誰かが勝手に入れてたのかもね」

と言ってくれました。でも誰かがそんな恐ろしいものを。勝手に私のパソコンに入れたというのは本当らしく、それで私が酷い目にあった、という事のようにです。私は何もしていないのに。

私は明子に頼んで、私のファイルという事でインターネットに流

れているものの一部を、集めて印刷してもらいました。私のパソコンは押収されてしまっていたので、何が流出しているのか調べられなかったからです。自分のファイルなのに変な感じですが、それらの中のいくつかは、中身も変でした。

例えばあるレポートは、私の名前も入っているし、実際私が書いたものでしたが、でも、随分と前に書き上げて提出したはずなのに、不思議な事にインターネットに流れているそれは書きかけのままのファイルで、もうこんなファイルなんか残っていないかったはずなのです。

あるいは別のレポートは、明らかに見覚えの無いもの、授業を選択したものの、実際には受講するのをやめてしまった講義のレポートに私の名前だけ入っていて、ありえないはずのものでした。パソコンは勝手にこんなファイルを作ってしまうものなのでしょうか？ どうやってこんな古いファイルや、変なファイルを作り出して、インターネットにはばらまくような事をやったのでしょうか？ 皆目検討が付きません。

私がそれら不思議なレポートの束を見ると、携帯に着信がはいりました。

「ああ、渡辺紗香さんですね、ちょうどよかった」

電話は大学からでした。

「今回の事件ですけどね、大学としても在学者にWinn y利用者がいたという事で、何ら処分を科さないわけにもいかないわけです。それですね、渡辺さんにも停学をしてもらう事が決まったんですよ」

急な話にびっくりする。まさか休学なんて。

「停学期間など詳しい事は書類でお送りしますから、自分のした事をしっかり反省して、社会に復帰して下さい」

一方的に切られた電話を前に私は呆然とする。何もしていないのに、無茶苦茶な話です。

Winny

Winny(後編)(前書き)

警察の調査で紗香の無実は明らかになり、真犯人も判明するが、大きく様変わりした紗香の生活は変わらず、紗香は新天地を求めて留学する。

W i n n y (後編)

翌日、突然刑事さんが訪ねてきてこんな事を聞きました。

「以前に脅迫されたり、あるいは無言電話がかかってきたりといった事はありませんでしたか？」

「ええ、そういった事はありませんでしたけど」

答えながら今までと雰囲気の違いに私は戸惑っていました。

「それにしても、どうしてそんな事を？」

教えてくれないかも、って思ったのですが、警察の人は意外と簡単に答えてくれました。

「あなたのパソコンから不正なプログラムは見つかりませんでしたし、流出したとされるファイルのいくつかは微妙に異なっている。

あなたじゃなかったのかもしれない、という事で色々調べてるんですよ」

どうやらやっと私の言っている事が正しいことを認めてもらえたようです。

当然、私は無実なのですが、今さら違ったかもしれないと言われても、色々と遅すぎます。

私はほっとしたような悔しいような、複雑な気持ちになりました。

捜査が進んで無実っぽい事が分かり、パソコンを返してもらえらる事になったので、私は警察署に行ってきました。

「正しく使っていたようですね」

係員の人はにっこりと笑って、私にパソコンを渡してくれます。

あたり前です。法律に違反するような事はしていない、はずですよ。

「それで、犯人はどうやって私のデータをネットに流したんですか？」

私は思いきって、ずっと疑問に思っていた事を聞いてみた。

そうしたら係員の人はびっくりするような事を言った。

「このパソコンに侵入してデータを持ち出したのは間違いないようですね」

セキュリティは安全だと思っていていた私は驚いて聞き返した。

「私、マックを使っていたのに？」

「完全に安全なコンピューターなんてありませんよ。それに今回は、コンピューターを直接いじられたっばいですね。パスワードがかかっていますでしたし、簡単に操作できたんでしょうね」

自宅に侵入された可能性もないわけではないけど、大学で放置していた隙に操作されたのではないかという。ぞつとしない話。確かにずつと置きっぱなしにしていた事とかあったけど……。

係員さんはその後、私のコンピューターの管理がいかにまずかったか説明してくれた。

言われた事の半分も理解できなかったのですが、本当だったら注意しないといけない事がたくさんあるんだって事は理解できました。

「人間もセキュリティの一環なんです。使う人間の意識が低ければ、そこが最大のセキュリティホールになるんですよ」

係員さんが最後に言っていた、その言葉が全てでした。

犯人はもつともらしく見せかけるために私のパソコンからコピーして持ち出したファイルを、ニセモノのファイルに混ぜてネットに流したらしい。だから作成途中のレポートのような、中途半端なファイルが混ざっていたんだろうって。

でも、何のためにはまだ分かっていないそうです。

とりあえずパソコンを返してもらえたのは嬉しかったけど、犯人が勝手に触ったというのが怖かったし、それが私の管理がまずかったせいというのが悲しくもありました。

私は被害者でしたし、いけない事をしていたって濡れ衣をきせられて二重に被害者でしたし、だからということもないですが、その後も事件の行方が気になって、しばしば警察を訪れて話を聞かせて

もらっていました。

その日も警察署に戻ってきた刑事さんを見つけて、ちょっとお話をさせてもらったのです。

「捜査は進んでいるんでしょうか？」

「あのね、何度も言うようだけれども、Winnny のネットワークは匿名性が高いんだ。あなたのファイルをばらまいた犯人を特定するのは大変なんだよ」

その話は何度も聞きました。一度は図に書いて丁寧に説明してもらった事もありましたが、いまいちよく分かりませんでした。ただ、私は Winnny にはウイルスが出回っているって話を聞いていたので、思いきってそれを聞いてみました。

「危険なウイルスが出回っているのなら、利用している人も減っているんじゃないんですか？」

「それがそうでもないんだな。自分は大丈夫だって根拠もなく信じているのか、普通の利用者もそんなに減っていないし、そのウイルスがばらまいてくれるファイルを集めるような人間までいる」

そんなものなんですか。私は正直ちよつとびっくりしました。

「しかしなあ……操作をミスする確率がたとえ1%だったとしても、100もファイルを扱えば、1度もミスしない確率は36%程度になつちまう。リスクの塊なんだよ、今どきWinnnyでファイルを収拾するなんてのは」

刑事さんは疲れた顔でそう言うと、ガラス戸の方に足を向けます。

「ま、洗い出しは進めてますよ、手がかりが無いわけじゃない。：

…何か分かったら連絡します」

こうしてこの日も追い返されてしまったのでした。

対応は良くなったのだけど今度は部外者扱い。私は相変わらずカヤのソトに置いてかれている、そんな感じがします。

それから3日後、事態は急展開しました。ようやく真犯人が捕まったのです。

犯人は私に告白してきた武田君だったそうです。私が、前川さんと別れば、付き合ってもらえるんじゃないかって思ったんだそうです。前川さんに私が別の人と付き合っていると思い込ませるために、あの写真を偽造して、私が部室に置きっぱなしにしていたパソコンからファイルを盗んで、あたかも流出したかのように見せかけてばらまいたんだそうです。

武田君を振ってしまったのは悪かったと思っていたのですが、それがまさかこんな形で返ってくるとは思っても見ませんでしたので、ショックでした。

でも前川さんとはあれつきりです。お互いに何か気まずくて、もう元には戻れないのかな？ って思っています。

非難する時はあれだけ紙面も大きくとって大上段に構え、書かなくてもいいような仔細な事まで調べ上げて書いていたマスコミも、一応、謝罪記事を載せてくれました。終わりの方のページの隅っこの方に、形だけ「おわびします」と書いた小さな小さな記事でした。

大学も復学を認めてくれました。でも、私は……。

今、私は飛行機の中にいます。思いきって留学する事にしたんです。思い返してみれば今回の事件で私はずっと振り回されっぱなしでした。だから思いきって海外に行つて、そんな自分を変えて、もっと積極的な私になれたらって思っています。

W i n n y は、もう私の人生を変えてしまったけど、悪い方向ばかりじゃない、あれがきっかけで私は変わったんだって思えるようになったなら、今回の事件も、周りの人たちの反応も、きつと全部許せるようになるんじゃないかなって、そんな風に思っています。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542c/>

W i n n y

2008年11月7日07時24分発行